2019年度 JICA中国・四国

# 教師海外研修 ―ラオス―

## 授業実践報告書

# 教師海外研修概要

## JICAの国際教育プログラム

グローバル化が進む現在、地球に暮らす私たちが自ら足元を見つめ直し、日本を含めた国際社会が抱える課題に取り組むことが急務となっています。そのため、国際教育や開発教育、持続可能な開発のための教育（ESD）といった取組みを多くの教育機関が実践し、その関心と需要はますます高まっています。

また、新学習指導要領では「持続可能な社会の創り手」の育成がうたわれ、多様な価値観・生活習慣をもつ人々と国内外で共存できるよう、児童・生徒が互いの文化を理解し、尊重し合い、違いを認められるなど、新たな社会で生きていくために必要な資質・能力を育むことが求められています。

国際協力活動は主に開発途上国の現場で行われていますが、JICAでは途上国と日本の地域との懸け橋となるべく、国内でも様々な事業を行っています。中でも、長年にわたる国際協力の知見を活用して、小・中・高校や大学、教育委員会や自治体、市民団体などと連携して展開しているのが、国際教育プログラムです。

JICAでは、国際協力出前講座、JICA施設訪問、開発教育指導者研修といったプログラムを通じて、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりを支援しています。教師海外研修は、そのプログラムのひとつです。

## 教師海外研修とは

### ● ねらい

本研修は、国際教育・開発教育に関心を持つ教員を対象に、実際に開発途上国を訪問し、国際協力の現場を視察することで、途上国の現状や日本との関係性、国際協力への理解を深め、その成果を、学校での授業等を通じて、地球の未来を担う児童・生徒への教育に役立ててもらうことを目的として実施しています。

国内で実施する派遣前・帰国後の研修では、ワークショップ体験などを通じて参加型学習の手法を学び、海外研修での知見をより効果的に還元するための授業づくりのサポートも行います。

帰国後は、教室にいる児童・生徒はもちろん、地域において他の教職員や市民にもその経験を発信してもらい、持続的に国際教育・開発教育の担い手として活躍していただくこともねらいとしています。

主催：独立行政法人国際協力機構　中国センター（JICA中国）
　　独立行政法人国際協力機構　四国センター（JICA四国）
後援：外務省、文部科学省
　　鳥取県教育委員会、島根県教育委員会、岡山県教育委員会、
　　広島県教育委員会、山口県教育委員会、徳島県教育委員会、
　　香川県教育委員会、愛媛県教育委員会、高知県教育委員会、
　　岡山市教育委員会、広島市教育委員会

※本報告書はJICA中国・四国各ホームページからもダウンロードできます。
　ワークシートやデータなどそのままご使用いただけますので、どうぞご活用ください。

## ● 研修のながれ（2019年度）

### 募集・選考

○募集（4月～5月15日）　○書類選考、結果通知（5月下旬）　○面接選考（5月27日～6月3日）
○最終結果通知（6月7日）

### 派遣前研修

6月29日(土)～30日(日)　会場：岡山国際交流センター（岡山県岡山市）

○海外研修について：ラオス国事情、研修日程と訪問先解説、渡航手続きについて
○講義：「開発教育とは～授業実践を見据えて～」
山中 信幸 氏（川崎医療福祉大学 教授）
「過年度参加者による体験談」（教師海外研修過年度参加教員）

### 海外研修（ラオス）

8月7日(水)～17日(土)　※8月6日(火)出発前オリエンテーション（大阪）

### 海外研修レポート提出

8月29日(木)

### 帰国後研修

8月31日(土)～9月1日(日)　会場：岡山国際交流センター（岡山県岡山市）

・海外研修で得た資料や情報を参加者全員で共有・整理。参加型手法を改めて学びながら、現地の知見をどう教材化するか考え、授業案を作成。（助言指導：山中 信幸 氏）
・中国、四国の教師海外研修過年度参加教員による講義。授業実践への事前準備、テーマ設定や児童・生徒の様子、周囲の教職員の反応や今後の課題などを共有し、参加教員の授業案作成へのアドバイスも行う。

### 所属校での授業実践

9月～2020年1月

### 授業実践報告書提出

2020年1月14日(火)

○**中国：第2回国際教育研修会**　2020年1月25日（土）　会場：エソール広島（広島県広島市）
講師：大谷 直史 氏（鳥取大学 教育支援・国際交流推進機構 教員養成センター 准教授）

○**四国：授業実践報告会**　2020年2月15日（土）　会場：JICA四国（香川県高松市）
**2019年度国際理解教育セミナー**　2020年2月16日（日）　会場：アイパル香川

# 研　修　国　概　要

## ラオス人民民主共和国
(Lao People's Democratic Republic)

**首　　都**：ビエンチャン

**面　　積**：24万平方キロメートル（日本の約3分の2）

**人　　口**：約649万人（2015年、ラオス統計局）

**政　　体**：人民民主共和制

**民　　族**：ラオ族（全人口の約半数以上）を含む計50民族（2018年12月にブル族を採用）

**言　　語**：ラオス語

**宗　　教**：仏教

**気　　候**：熱帯モンスーン気候に属し、高温多湿で雨季（5～10月）と乾季（11月～4月）がはっきりしている。
ビエンチャンの年平均気温は乾季22.1℃、雨季28℃

**通　　貨**：キープ（Kip）　10,000キープ＝約124円（2020年1月）

**1人あたりGDP**：2,472ドル（2017年、ラオス中央銀行）

**主要産業**：サービス業（GDPの約42%）、農業（約17%）、工業（約29%）（2017年、ラオス統計局）

**主要貿易相手国**：タイ、中国、ベトナム 他（2017年、ラオス工業商業省）

**<日本との関係>**

従来より良好な関係。1955年に外交関係を樹立し、2015年3月に60周年を迎えた。

**在留邦人数**：863人（2017年10月、在留届ベース）

**在日ラオス人**：2,785人（2018年6月、入管発表）

**文化関係**：日本は1976年より文化無償協力案件を実施。
文化遺産保存、スポーツ交流、人物交流等の文化交流も拡大中。

**経済関係**：対日輸出　約130億円…金属製品、繊維製品、乗用車、一般機械
対日輸入　約168億円…衣類、食料品、原料品、化学製品

日ラオス外交関係樹立
60周年ロゴ

**日本からの投資**：コンサルティング、縫製・部品製造業、電力 等（いずれも2017年、財務省貿易統計）

**日本の援助実績**（2016年度まで）：(1) 有償資金協力　484.36億円
(2) 無償資金協力　1,529.73億円
(3) 技術協力　730.88億円

（2020年2月付　外務省ホームページ「各国・地域情勢」（ラオス）より）

# 教師海外研修日程

## 研修テーマ：SDGsの視点からラオスの課題を考える

| 月　日 | | 内　容 | 宿　泊 |
|---|---|---|---|
| 8月 6日(火) | 夕方 | **【出発前オリエンテーション】** 関西空港周辺ホテルにて | 大阪 |
| 8月 7日(水) | 午前 | 関西空港を出発、空路にて乗継地のバンコクへ | ビエンチャン |
| | 夜 | ラオスの首都ビエンチャンのワッタイ国際空港に到着 | |
| 8月 8日(木) | 午前 | **【JICAラオス事務所ブリーフィング】**<br>•ラオスの概況とJICAの協力内容<br>•ラオスの教育事情について | |
| | 午後 | **【視察】「COPE Visit Center」訪問**<br>•JICA専門家による解説「ラオスにおける不発弾の現状について」<br>•展示見学 | |
| 8月 9日(金) | 午前 | **【交流プログラム】「ラオス日本センター(LJI)」訪問**<br>•日本語を学習する学生との交流、意見交換 | |
| | 午後 | **【JICA事業視察(技術協力)】**<br>**ビエンチャンバス公社能力改善プロジェクトⅡ訪問**<br>•JICA専門家からの事業概要説明<br>•バス公社見学、バス乗車体験 | |
| 8月10日(土) | 朝 | 空路にて南部の都市パクセへ | ドンコー村 |
| | 午前 | パクセ市場見学、教材収集 | |
| | 午後 | **ホームステイ(メコン川の中州の村「ドンコー村」へ)**<br>•村の見学<br>•子どもとの交流、学校視察など | |
| 8月11日(日) | 朝 | ホームステイ終了 | パクセ |
| | 午前 | **【無償資金協力・技術協力現場視察】**<br>世界遺産ワットプー訪問 | |
| | 午後 | パクセに戻り、ホテルへ<br>ホテルにて研修の中間振り返り | |
| 8月12日(月) | 午前 | **「Champasak UXO」活動視察**<br>•事務所訪問、ラオスにおける不発弾に関するブリーフィング<br>•UXO Laoの寮 視察<br>•不発弾除去現場訪問、爆破処理を見学 | |
| | 午後 | **国際NGO「Village Focus International」訪問**<br>•ラオスにおける人身取引問題に関するブリーフィング<br>•団体の活動紹介<br>•シェルター視察 | |
| 8月13日(火) | 午前 | **【青年海外協力隊活動視察】チャンパーサック県病院**<br>•「看護師」隊員の活動視察、意見交換<br>•病院見学 | |
| | 午後 | **【青年海外協力隊活動視察】チャンパーサック教員養成校**<br>•「公衆衛生」隊員の活動視察<br>•現地教職員との意見交換<br>•学校見学 | |
| 8月14日(水) | 朝 | 空路にてビエンチャンへ | ビエンチャン |
| | 午後 | **【JICA事業視察(技術協力)】**<br>**水道事業運営管理能力向上プロジェクト(MaWaSU2)**<br>•事業概要説明<br>•Chinaimo Water treatment Plant(浄水場)視察 | |
| | 夜 | 青年海外協力隊員、JICA職員との夕食懇談会 | |
| 8月15日(木) | 午前 | •市内視察(パトゥーサイ、タートルアン訪問)<br>•市場、教科書印刷会社にて教材収集 | |
| | 午後 | **【草の根技術協力・NGO視察】**<br>**「アジアの障害者活動を支援する会(ADDP)」**<br>•事業概要ブリーフィング<br>•障害者就労支援施設見学(クッキー工房)<br>•障害者スポーツ振興プロジェクト視察(卓球バレー体験) | |
| 8月16日(金) | 午前 | 最終振り返りミーティング、研修報告準備 | 機内 |
| | 午後 | JICAラオス事務所にて研修報告 | |
| | 夕方 | 研修全体振り返り・授業案作成の準備 | |
| | 夜 | ビエンチャンのワッタイ国際空港を出発、バンコク経由にて日本へ | |
| 8月17日(土) | 朝 | 関西空港到着後、解散 | |

# 海外研修レポート

**8月7日(水)**　松下　直樹（愛光中学・高等学校）

## 訪問先

①関西国際空港
②スワンナプーム国際空港
③ワットタイ国際空港
④マノロムブティックホテル

## 研修内容

空港から考える、インバウンドの増加に対して、日本が工夫すべきこととは?

## 所　感

ホテルで人数確認を終えて、関西国際空港へと向かった。皆順調に出国の手続きを終えていくなか、私は荷物検査にて、虫除けスプレーを没収されてしまった。ただ、気落ちしている暇などない。緊張からかどこをふらつくともなく足早に搭乗ゲートへ。機内に入ると、まさかの２階席、しかも広々。食事は、ポークカレーをチョイスした。米（恐らくタイ米）を手で食べてみたところ、粘り気が思いのほか少なく、ポロポロとこぼれ落ちそうなくらいだ。

バンコク・スワンナプーム国際空港着。さすが世界最大級のハブ空港、雑多だ。生暖かい気温とむわっとする湿気に、熱帯を感じる。空港では、ムスリムをはじめインバウンドの増加に対して、日本が参考にすべき点を、各所に確認することができた。たとえば、空港内には、礼拝所（フロアの一室）がもちろんあって、男性が一人、靴を脱いで祈りを捧げていた。その礼拝所の近くのトイレに入ってみると、男性の小用も仕切りがしっかりとあり、性的な部位が他人の目に触れることを極度に嫌うムスリムへの配慮が感じられた。空港内のレストランをいくつか見て回ったが、日本のお弁当のようにワンプレートで食事を提供するお店が賑わっていた。その店員のなかにはヴェールを身につけた女性がおり、「ハラル認証」が額縁に入れられて掲げられていた。

ビエンチャン・ワットタイ国際空港へ。意外に飛行機が大きい割に乗客はまばら。窓からバンコクの都市圏インフラや、遠目にタイランド湾も確認できた。軽食で出たものすべて（ピザ、ブラウニー、水にまでも）に「The Central Islamic Committee of Thailand（タイ国イスラーム中央委員会）」から認証を受けたハラルマークを確認できた。

1時間ほどで空港に到着。2年前に日本のODAで建設されたばかりで真新しい。入口を出たところでJICAラオスの職員が笑顔で迎えてくれた。2グループに分かれミニバンに乗り込み、ホテルへ。10分程の道中で目にした、2人乗りのバイク（もちろんノンヘル）、賑わう露店、店前に路駐されたバイクや自動車、市場前のテーブルで食事をする家族…。目にするものや、臭い、音それらすべてが新鮮だ。明日からどのような学びが待っているのか、ワクワクが溢れ出してきた。

<空港内の礼拝所>

<小用トイレの仕切り>

<ハラル認証を受けたレストラン>

No.

Date　　・　　・

## 8月8日(木)　森　優美子（松山市立伊台小学校）

### 訪問先

①JICA ラオス事務所

②COPE Visit Center

<JICA ラオス事務所>

### 研修内容

①JICAラオス事務所

　ラオスの概要、JICAの協力内容、ラオスの教育分野についての説明

②COPE Visit Center

　展示見学後、不発弾の現状、処理の仕方、JICAの協力体制などの説明

### 所　感

　ラオスのビエンチャンに着いて、初めての訪問先がJICA事務所だった。ここで「ラオスにおけるJICAボランティア事業の概要」「ラオスの教育事情」についての話を伺った。協力隊派遣の歴史はラオスから始まったこと、現在までに1000人を超える日本人が派遣されてきたこと、累計では、保健医療分野の派遣が最も多く、看護師、助産師の隊員が活躍していることなどが分かった。教育分野では、日本と似ているところもあったが、日本ほど徹底されておらず、高等教育まで受けている子どもは日本より少ない。そこにはラオスが抱える様々な問題があった。しかし、何とか課題を解決しようと、現在は算数の教材開発を日本と共同で行っていた。以前のラオスの算数教科書は白黒で文字が多い印象を受けたが、新しい教科書は挿絵や解説のイラストがカラーで示されており、日本の教科書ととても似ていると感じた。ラオスの先生たちにも、日本の指導法を伝えており、現場で実践していると伺った。日本の指導をそのままラオスの先生や子どもたちに伝えることは難しいと思うが、ラオスの現状に合った方法に形を変えて定着していけばよいと考える。「日本らしさ」「ラオスらしさ」は、研修期間中私のテーマの一つとなった。

　COPE Visit Center では、不発弾について、撤去の方法、外国からの支援内容、不発弾の被害にあってしまった方たちの支援の方法について話を伺った。不発弾一発を見つけて撤去するまでには長い時間と労力が必要である。しかも安全に行うためには正確な情報が必要である。現場で活動している長田さんから話を伺うことができた。長田さんは、自分の得意なコンピュータの技術を生かして、不発弾撤去の一員として活躍している。コンピュータを使って不発弾の正確な位置、大きさ、深さなどをデータ化している。「不発弾を撤去することはラオス人を守る」という信念をもって、日々の活動に取り組んでいることに深く感動した。

　ラオスでラオス人のために活動している日本人がたくさんいることに驚いた。また、言葉の壁や習慣の違い、国民性の違いなど、いくつもの壁を乗り超えて今にたどり着き、現在も支援を続けていることに同じ日本人として誇らしく思った１日だった。

<算数の教科書>

<投下してくるボンビー>

<義足>

No.

Date　　・　　・

## 8月9日(金)　中山　舞（広島市立二葉中学校）、谷口　和輝（八頭町立郡家西小学校）

### 訪問先

①ラオス日本センター（LJI）訪問

②ビエンチャンバス公社能力改善プロジェクトⅡ訪問

### 研修内容

①ラオス日本センター訪問、日本語生徒との交流

ラオス日本センター側からあいさつ、ラオス学生からの質問に対する日本生徒の返答紹介

ラオス学生からラオスの文化紹介、日本の生徒&教師からの質問コーナー、歌（パプリカ）披露

②ビエンチャンバス公社能力改善プロジェクトⅡ訪問

事業概要説明、バス乗車体験

### 所　感

ラオス日本センター(Laos-Japan Human Resource Development Institute、以下 LJI)では、ラオスの学生が日本語だけでなく、盆踊りや茶道など日本の文化も学んでいる。また、LJI は週に１度ラジオを通じて活動の様子をラオス国内に伝え、日本の文化をラオスの人々に知ってもらう活動を行っている。

業務調整員として活動されている佐藤さんに、LJI の紹介をして頂いた。お話の中で「日本人が考える幸せとラオス人が考える幸せは異なる」という言葉を言われていた。私たち参加者は、１日の振り返りの中でこの言葉の意味について、一人一人が自分自身の視点で考えていきたいと話し合った。

交流では、事前に質問を受けていた“日本で流行っているもの”について日本の中高生が答えた動画や写真を紹介した。続いてラオスの学生が、約 20 分間日本語でラオスの文化について紹介をした。コーヒーブレイクの後は研修に参加する教員から「自分が感じる幸福度」「将来の夢」「自分が好きな日本の文字」について質問し、ラオス学生からの様々な意見を聞くことができ、有意義な時間となった。交流の最後には、2020年の東京オリンピックの応援ソングである「パプリカ」を全員で歌ったり踊ったりして、親睦を深めた。

バス公社では、まず株式会社片平エンジニアリング・インターナショナルの武田圭介氏の話を伺った。ラオス市内の交通事情として、道路には車やバイクの量が年々増え、渋滞が起こっている。路線バスについては、時刻通り運行しておらず、市民の生活に活用できる交通手段になっていなかった。無償資金協力として日本がバスを供与し続けていても、年間の乗客者数は年々減少していた。その理由に、バスの運転手が突然休んでしまうこと、運転手の給与が歩合制だったことから、決められたルートや時間を無視して運行することで報酬を得たりすること、また、運転手への指導が不十分で、バスのドアを開けたまま走るなど、安全面に不安があることなどがあげられる。このような理由から、運営面でたくさんの問題を抱え、組織として大きな改善が必要とされていた。

そこで、JICA の技術協力プロジェクトとして、新しい組織「City2」をバス公社内に設立し、既存を活用しない組織の大きな改革を行った。「安全」「便利」「信頼」のコンセプトをもとに、運転手の労働環境を改善し、利用者の満足度を高め、また乗りたいと思えるバスを提供することを目標とした。「City2」の本部を見学した際、バス内外に設置されたカメラでバスの状況が確認できることや、GPS で運行状況を確認できることなど、日本式に徹底管理され運営されている様子を見させていただいた。

また、この「City2」の運営にあたり、京都市からの寄贈バスを使っていた。この京都市から寄贈されたバスに、私たちは乗車した。バスには日本で走っていたことが分かる表示が多く見られる一方、バスの昇降口を反対にしたり、優先席に僧侶のイラストがあったりと、ラオスで運用していけるように改善されているところもたくさんあった。しかし、ハンドルの位置を変えるのは予算の関係上難しく、右ハンドルのまま運用されている。

No.

Date

このような支援から、ラオス人の満足度は上がっているように思えた。しかし、現状は今乗っている人以上の需要はあまりないようで、市民に根付いた支援にはまだなっていないようである。この現状を、支援している方々は心配しておられ、もしこのままバス等の公共交通機関が広がっていかなければ、道路に車が溢れ、交通インフラの整備がすすんでいかないとおっしゃっていた。

支援に必要なこと、それは『選択肢の提供』であると考える。市民にとって、「バス」という公共交通機関があることを知り、バスを利用したいというニーズを高めることが課題である。バスという選択肢が市民にとって有効に感じられることで、ニーズが高まり、今後のラオスにおける路線バスのユーザーを増やすことにつながると感じた。そうすることで、市内の渋滞が緩和されていき、交通インフラが整備されていく。そのために、子どもへの教育や、学生の優遇措置、警察と連携した安全性のアピールなど、情報提供を通じて、ユーザーのメリットを全面に押しだした支援をしていくことが大切であると考え、PR活動をしていることも教えていただいた。

<LJIでの交流の様子>

<最後に全員で記念写真>

<京都市からの寄贈バス>

<乗車体験の様子>

No.

Date　　・　　・

## 8月10日(土)　坪池　由美子（熊野町立熊野第一小学校）、橋田　佳子（高知市立はりまや橋小学校）

### 訪 問 先

①パクセー県市場　②ドンコー村

### 研修内容

①パクセー県市場

地元の人たちも使う市場を散策し、シンや教科書、写真など授業に使えそうな教材を収集した。

②ドンコー村

子供たちとの交流を行った。全員での交流としては、ダンス・大縄跳び、リコーダー演奏などを行った。その後、個人が準備していたおはじきや折り紙、紙飛行機などの日本の昔ながらの遊びを使って交流した。その後は、ホームステイで伝統的なラオスの生活を体験した。

### 所　　感

市場には新鮮な野菜や果物、そして思った以上に多くの種類の魚介類があった。カエルやカタツムリなども売られており、ラオスという国の自然の豊かさを感じた。また民族衣装シンも多くの店で売られており、自分たちの伝統を大切にしていることがうかがえた。

また小学校の教科書も購入した。先日の JICA ラオス事務所訪問の際に紹介してもらった日本と協力して作った算数の教科書もあった。1冊2万キープほどであった。

日本では義務教育の小学校と中学校では、教科書は無償である。これは高知県から始まった運動で勝ち取った権利であると人権教育で学んだことがある。

しかしラオスでは無償ではなく、各家庭で買うという。10教科ほどあるので負担も小さくはないと思われる。地方の学校によっては、児童が教科書を持たずに、ただ先生の板書をノートに写すだけのところもあると聞いた。兄弟でおさがりを使う場合もあるという。そんな風に場所や家庭によって教育の環境や条件が大きく異なっていていいのだろうかと疑問に感じた。教育は国の発展の土台となるかけがえのない分野である。やはり義務教育の間だけでも、教育の機会や条件は等しく与えられてほしいと切に思った。

<ラオスの小1算数教科書表紙>

〈裏表紙には日本のJICAとの協力で作られた教科書とある〉

午後からは、ラオスの伝統的な暮らしを続けているドンコー村へ船で移動した。子供たちとの交流でも、バーシーの儀式や村の人たちとの食事の時も、温かく歓迎してくれていることが伝わってきた。大人も子供も、最初は恥ずかしそうにしているが、話しかけたり一緒に活動したりするととてもよい笑顔を見せてくれる。バーシーの儀式で、年配の女性が腕を優しくさすり微笑んで言葉をかけてくれたときは、今はもういない祖母のことを思い出した。ドンコー村には警察も病院も自動車もない。しかしそれは、貧しいから建てられないというわけではなく、必要がないから存在しないようだった。治安が良くて住民同士のつながりも濃く、問題はみんなで協力して解決するのだという。村の中には広々とした水田が広がり、村のあちこちに果物の木が生え、目の前のメコン川では漁もできる。電気が通っているのでテレビを見ることもできるし、さまざまな家電製品も使える。最新の機器を使っていても何かイライラしている人の多い日本とは違い、村長さんが言われた通り平和で穏やかで豊かな村だった。そんな中で違和感を覚えたのは、子供たちがごみをその辺へ捨てていることだ。村ではどのようにごみ処理をしているのか聞いてみると、「まとめて村の中で焼く。ペットボトルも燃えるから一緒に燃やす」ということだった。

最新機器や高い建物などはないけれど、非常に心豊かな暮らしを送るドンコー村には、支援は必要ないように思えた。しかし、ラオスに来てから何度も聞いた「教育が足りない」「情報が足りない」という現実の一端を垣間見て、ラオスに必要な支援、適切な支援とは何かということを改めて考えさせられた。

〈バーシーの儀式〉

〈子供たちとの交流〉

No.

Date　・　・

## 8月11日(日)　得重　直也（山口市立中央小学校）

### 訪問先

世界遺産ワットプー

### 研修内容

①ワットプー見学

フランスやインドの協力により建物の再建を行ったことを知った。

日本の無償資金協力・技術協力により、資料館が整備されていることを知った。

②中間振り返り

研修前半を振り返り、個人個人が感じたことを共有、後半に向けての視点について考えた。

### 所　感

仏教とヒンドゥー教の合わさった遺跡の見学を行った。建物の造りやそこからの景色は圧巻であり歴史や自然の雄大さを感じた。ラオス政府は、遺跡の保管に努めていたが、崩壊防止に必要な設備や人材が不足しており、遺跡救済のため国際社会へ救助を要請し、現在の美しい姿になっている。世界文化遺産・自然遺産の保護・保全はSDGsの11番「住み続けられるまちづくりを」にあたり、その国だけでなく、世界で守っていこうという姿勢を感じられた。また、日本のみならず、フランス、インド等の国も支援を行っていることを知り、世界のつながりを学ぶことができた。

しかし、その背景には遺跡の整備を行うため、そこに住んでいた住人の移住があったことも知った。資源を守ること、整備することのみが大切ではなく、そこに住む人々の生活や願いがあってこそ価値のあるものになるのではないだろうか。このことを事前研修で学んでいたことで、見方や考え方がより深まったように思う。

また、観光客の少なさも気になった。ラオスは経済発展の柱として観光促進を行っている。観光の誘致、宣伝等の必要性についても考えることができた。学校で子どもたちに指導していく際、建物、自然の美しさだけでなく、そこにある背景についても考えていきたいと思う。また、身近な生活に置き換えて、自分の住んでいる町や地域をどのようにしていきたいか、どうすればもっと人が集まり自分たちの町を知ってもらえるかなど、ふるさと学習にもつなげることができると思う。

中間ふり返りでは、支援のあり方について考えた。当事者（ラオス国、国民）の目線で考えていくことを青年海外協力隊員の方の話から学んだ。ただ物資、人材支援を行うことが開発ではなく、その国にとって何が必要か、どのような方法が適切かを考えることの必要性について意見が出た。また、研修前に考えていたラオスの印象からの変化について意見を出し合い、貧困国に対して「理想の貧困」のイメージを作ってしまっていないかと考えた。直接見て、話して考えることにより、より深くラオスという国について、また、持続可能な支援のあり方、そこに携わる人々の考えや願いなど、内面から考えることができる。私にとってとてもよい経験になり、今後、学んでいく視点がとても深まった。

<ワットプーにて集合写真>

<ワットプー遺跡にあった技術協力のプレート>

No.

Date　　・　　・

## 8月12日(月)　阿部　絵理子（広島県立芦品まなび学園高等学校）

### 訪問先

①UXO−LAO チャンパーサック支部
②NGO「Village Focus International」

### 研修内容

①UXO−LAO チャンパーサック支部
　UXO−LAO の職員から不発弾処理の概要について説明を受けた後、UXO−LAO の寮を見学。
　その後、不発弾除去の現場に移動し、話を聞いた後、不発弾除去を実際に体験した。
②NGO「Village Focus International」
　センター長から事業内容の紹介を受けた後、施設内を見学。女の子たちが縫製作業をしている様子や、
　キノコの栽培や養鶏小屋も見学した。

### 所　感

　今日は、穏やかでのんびりした雰囲気のあるラオスの、負の側面を見た一日だった。
　ラオスには18個目の SDGs の目標がある。「LIVES SAFE FROM UXO」。ラオスにはベトナム戦争のときに落とされた不発弾が多く残っており、すべての不発弾を撤去するには、あと 200年必要とも言われる。農作業中の人や遊んでいる子どもたちが今も被害にあっている。UXO−LAO では不発弾処理だけでなく、市民からの情報収集や、子どもたちに不発弾の危険を伝えるための啓発教育を行っているそうだ。午前中の UXO−LAO 事務所でのブリーフィングの後、除去作業中の現場を見学した。除去現場では朝見つかった2つの不発弾の処理を体験した。職員の方の合図でボタンを押すと 300m先に置かれた不発弾が爆発し、お腹にまで響く爆発音と振動が伝わってきた。悲鳴もあがった。怖くて驚いて涙も出た。これまで平和や戦争についてイメージや言葉だけで理解してきたが、はじめて怖いという体感で平和と戦争について考えた。
　午後は NGO「Village Focus International」を訪問した。〝夢をつくる〟と名づけられたこの場所は、人身売買被害者の心と身体のリハビリと自立へ向けた教育を行う施設である。中では少女たちが縫製作業をなごやかな雰囲気で行い、控えめに笑みを向けてくれた。ラオスの貧困地域に住む子どもたちが、生活のためにタイに売られて行き、傷を抱えてラオスに帰国してくる。村レベルでの啓発活動も行なっているが、解決にいたっていない。この施設では保護した子どもたちに、縫製・調理・織物などの職業訓練を行なったり、お金のやりくりや生活設計を考えさせるなど、自立した生活を送るための教育支援を行なっている。「この施設を出て行くことが成功ではなく、自分で収入を得て、自立することが成功」と、センター長は教育を受け、職につき、自立することの大切さを語ってくださった。
　振り返りでは、不発弾や人身売買の問題を自分事として考えることの難しさや、ラオスが抱える貧困から派生する様々な問題の深さ、ラオスの負の側面を教材化することへの違和感などについて話をした。この日は先進国の人間として、また教師としての自分を見つめ直す一日だった。

<不発弾除去に関する現地でのブリーフィング>

<UXO-LAOチャンパーサック支部でのブリーフィング>

<不発弾の危険性　啓発のポスター>

<不発弾除去を体験>

<Village Focus Internationalにてセンター長と>

No.

Date　・　・

## 8月13日(火)　中川　尚子（岡山市立操南中学校）

### 訪 問 先

①チャンパーサック県病院

②チャンパーサック教員養成学校

### 研修内容

①チャンパーサック県病院

青年海外協力隊として派遣されている吉田隊員（看護師）より、配属先の概要、病院の基本情報、事業内容、課題、活動計画、活動目標などについてお話を伺った後、吉田隊員と一緒に病院内を視察して回った。

②チャンパーサック教員養成学校

校長先生、副校長先生よりラオスの学校制度と教員養成校の制度について紹介、その後、青年海外協力隊として派遣されている岩井隊員（公衆衛生）より、新しく導入された科目「エコヘルス」とその実践、今後の計画についてお話をいただいた。その後、養成校の校内を視察。夏休み中であり授業は行われていなかったが、教員研修の様子を見せていただくことができた。

### 所　　感

チャンパーサック県病院では、日本との病院とあまりにも違うことに衝撃を受けた。ベッドの数が足りず、廊下に並べられたベッドや、ござの上に患者さんが横たわっていること、薬の管理がずさんで中身が混ざっていたりすること、病院食がなく、家族が食事を作ってくること、洗われていないシーツがそのまま使われること等々、リスクの面で日本では考えられない数々の課題があることを知った。吉田隊員は、看護師の技術、能力の向上と院内環境の改善を目指して尽力されている。地元の人との信頼関係が築かれているのはこれまで派遣されてきた隊員の方々の努力によるものだが、指導をしても、なかなか継続していかない原因には、ラオスの人の国民性や、なぜしないといけないのかが分かっていないことが多いとのこと、それを知るシステムも必要だとの話が印象的であった。ラオスはつきそいの家族の人数が多く、献身的でマンパワーがあることが強み。しかしそれがかえって病院の衛生状態を悪くしている面もある。日々悩みながら課題改善のために一つずつ活動にとり組む吉田隊員の熱い思いを感じた。

チャンパーサック教員養成校では、岩井隊員より、「エコヘルス」という新しい科目への取り組みの説明があった。「エコヘルス」とは生態系と健康の関連性を考える新しい科目で、環境教育と保健教育が合わさったようなもの。カリキュラムに正式に導入されるのは２月からとのことだが、何度か授業も行われ、附属小学校での健康診断や、JICA 支援による手洗い場の設置と手洗い指導なども実践された。実際に手洗い場を見せていただいた。教育でラオスの人の健康や環境に関する意識が変わることで、午前中に視察した病院での医療面での課題の改善や、ラオスの人に合った持続可能な発展への可能性を感じた。研修の予定にはなかったが、希望者で岩井隊員がボランティアをされている日本語学校へも訪問し、授業を見せていただいた。教科書とノート、ホワイトボードのみを使った授業にもかかわらず、生徒一人一人との信頼関係があり、楽しく一生懸命勉強する生徒さんの姿から、同じ語学を教える私にとって学ぶべきものがあった。

<廊下にござが敷かれた病院>

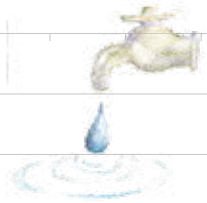
<附属小学校　JICA支援で作られた手洗い場>

<岩井さんの授業の様子>

No.

Date　　・　　・

## 8月14日(水)　中村　秀司（鳥取県立鳥取西高等学校）



### 訪問先

JICA 事業視察（技術協力）水道事業運営管理能力向上プロジェクト（MaWaSU2）

### 研修内容

①Chinaimo Water Treatment Plant 視察

メコン川から着水井、混和池、沈殿池、ろ過池を経て、浄水池、排水池までの過程で、濁質を除去するシステムを視察した

②事業概要説明

シーソモン氏（水道公社国際交流担当・チナイモ浄水場場長）

首都ヴィエンチャンNPNLは1963年設立、4浄水場を有する。首都人口約86万人のうち、約61万人に水が供給され、メコン川、ングム川、地下水から主に取水している。職員は 688 名。組織内には、管理、サービス、総務、財務部門があり、理事長は副市長、副理事長はバス公社総裁、財務局長で、科学技術、計画投資、公共事業、青年同盟、女性同盟が理事に入っている。生産能力に比して、約2万㎥／日が不足しているため拡張工事を実施している。施設整備は、日本の支援により初めて着手され、技術協力や人材育成の面で支援を受けている。2012年から開始されたプロジェクトは現在フェイズ2である。

木下雄介さん（JICA MaWaSUⅡプロジェクトコーディネーター）、山内さん（埼玉県企業局）、
徳永隆さん（横浜市水道局・財政担当）、藤瀬大輝さん（川崎市上下水道局・水質担当）

ラオス全体の水道普及率は約25%で人口約650万人のうち約162万人（2019年）が水道にアクセスできるが、SDGsは2030年までに100%の人々への供給を目標としている。水道整備は1963年からの創設期、1975年からの推進期、1990年以降の普及強化期、2010年からの拡充期のように発展してきた。一方、井戸水の利用も多く、山水、沢水、地下水などから取水する人々や、水運びを要する人々も多い。日本の近代水道は、アメリカの来航以降、横浜の成長に合わせて発達した。英国のヘンリー・パーマーによる野毛山浄水場が初めで、1887 年に給水が開始された。コレラ・チフスといった水系感染症の解消にも貢献した。日本と違い統計のないラオスにおいては乳児死亡率が参考となり、日本 1.9%に対してラオス 48.6%と高い現状がある。今後の課題としては、①普及・拡大、②独立採算、漏水管理、人材育成が重要である。以前の援助は、施設整備等のハード面に偏り、今後はメンテナンス技術や人材育成といったソフト面での支援強化が大切である。5年間で達成が期待されることは、①制度、②施設、実施能力、③技術、④水道公社の能力強化である。

### 所　感

最も印象に残った言葉は、「日本のやり方を押し付けない、ラオスに合った形ですすめること」「ラオスから学んでいる」である。水道事業の推進は、両国の関係づくりに長年の蓄積があり、良好な関係を築いてきたこと、今後も良好であり続けようとすることを大切にしようとしていることが、くっきりと感じられた。「ラオスにはラオスの決定の仕方があり、日本のやり方を押し付けない」「ラオスの状況やニーズにあったことに取り組む」「日本のやり方が一番というのは間違い」「ラオスにはラオスの政治状況があり、踏み込んだことをしないようにすることも大切」「ラオスにいいところがあり、一生懸命ということを思い出させてくれる、これを周りに伝えたい、ラオスから学んでいる」「社会主義と仏教の国で、悪いことをしてはいけないという価値観は、道徳観として日本と近く、仕事がやりやすい」「これまでのハード面の整備に加えて、自分たちでメンテナンスが行える技術を教えていくことが大切」など、講義以外のところで職員の方々が大切にしている考え方を多く聞くことができた。今後は支援なく独立採算で水道事業を運営していくことが期待されるが、送水ロスが30%と多いことや施設設備の老朽化に対するメンテナンス技術の教育等、いまだ多くの課題がある。他にも、水道資格制度、長期間にわたる日老関係の信頼性、ラオス人の日本招聘、過疎地での井戸水等の小規模水道といったお話をお聞きすることができた。「水」をテーマとする授業づくりに役立てていきたい。

<チナイモ浄水場の視察>

<取水するメコン川>

No.

Date ・ ・

## 8月15日(木)　大久保　幾代（徳島県立国府支援学校）

### 訪問先

特定非営利活動法人NPOアジアの障害者活動を支援する会（ADDP）

### 研修内容

①事業概要説明

②卓球バレー体験

　ルール説明を聞いた後、数人ずつ交代でチームに加わり、練習試合を行った。

③ラオス手話体験

　カフェで働く聴覚障がい者の方にラオス手話を教えていただいた。

### 所　感

「特定非営利活動法人 NPO アジアの障害者を支援する会 (ADDP)」は、前島富子さんを代表として 1992 年 10 月に設立された。アジアの国々では、障がい者が社会参加する上で様々なバリアが存在し、多くの障がい者が困難に直面しており、1981年以前の日本と同じような状況にあるという。ラオスに来て23年になる前島さんは、これまでにアジア 18カ国をまわってセミナー等を行い、支援活動を行ってきたそうだ。2017 年に、この日私たちが訪問させていただいた「Minna no cafe」がオープンし、知的障がい者と聴覚障がい者が働いている。

　事業概要を聞いた後、卓球バレーを練習している場所に案内していただいた。向かう途中聞こえてくる歓声に、私たちはわくわくしながら部屋に入った。私は初めて卓球バレーというスポーツを体験したので、通訳された説明だけではルールも曖昧だったが、隣に座ったプロジェクト訓練生の方が笑顔とジェスチャーでやり方を教えてくれた。短い時間の体験だったが、あれほど笑顔があふれて盛り上がり、一体感を感じられるスポーツは初めてだった。

　次に、カフェで働く聴覚障がい者の方2名にラオス手話を教えていただいた。手話には国際基準というものがなく、国によって少し違っているという。カフェのガラスボードに書いた簡単な絵や数字と手話、それとアイコンタクトによるコミュニケーション。「男の子・女の子、1～ 100までの数字、同じ・違う」などの手話を学んだ。話し言葉はなくても、彼女たちが伝えたいことが「理解できる喜び」、「つながる喜び」を感じた温かい時間だった。また、アイコンタクトの大切さを体験することができた貴重な機会となった。

　優しくて温かい人たちやその雰囲気に包まれたためだろうか、この日の振り返りでは涙を浮かべる人が少なくなかった。ラオスにおける障がい者の自立と社会参加の道はこれからであるが、このような草の根技術協力を行う日本人がいることを誇りに思った。それと同時に、誰もが自分らしく幸せに生きていけるインクルーシブ社会の構築に向け、自分ができることに一歩ずつ取り組んでいきたいと感じた。

<卓球バレー体験>

<練習試合後に全員で>

<ラオス手話講師>

No.

Date　　・　　・

## 8月16日(金)　関　悠夏（丸亀市立城坤小学校）

### 訪問先

JICA ラオス事務所

### 研修内容

①JICA ラオス事務所スタッフへの研修報告

　1人1プログラムを担当し、学んだこと・考えたこと・授業への活用方法をパワーポイントを使って発表した。

②全研修を終えての振り返り

　校種別に分かれ、授業への活用方法を考えた。その後、全研修を終えて学んだこと・感じたことをそれぞれが振り返りとして述べた。

### 所　感

　午前中は JICA 事務所で研修報告の資料作りを行った。怒涛のように過ぎていった研修をじっくり振り返り、自分の中で考え整理しなおすためのよい時間となった。参加者それぞれが、日直の日のプログラムの報告を担当するようにした。そのプログラムで自分は何を感じ、何を考え、何を子どもたちに伝えたいのか、どのように活用すべきかを考えた。そのため、少しずつ授業の全体像や詳しい内容が見えてきた。

　午後からの発表は、女性参加者はラオスの正装「シン」を着て行った。少しでもラオスのことを理解したいと思いラオスの女性と同じ服装で臨んだ。各参加者が、印象に残ったことを写真で提示したり、クイズ形式にしたり、動画にしたりとさまざまな手法を活用し報告した。参加者がそれぞれの視点で授業での活用方法を紹介したため、各プログラムの新しい教材としての活用方法を知ることができた。

　その後、校種ごとに分かれて、単元構成や授業での活用方法についての話し合いを行った。図書の時間や国語などいろいろな授業との関連付けを紹介し合い、とても参考になった。他の参加者の視点も授業に取り入れていきたい。

　最後に、全研修を終えての振り返りを行った。「ラオスが大好きになった。そして、改めて日本が好きになった」「自信をもって成長したと言うことができる」「毎日、さまざまなことを感じ、考え続けてしんどかったけれど、それが楽しかった」などの意見があった。この日の振り返りは、今までで一番参加者の顔がいきいきしているように感じた。知る喜び、考える楽しさ、達成感を実感できるような充実した研修であったためだと思った。

　子どもたちがこのような顔になるような授業をしたいと強く感じた。本研修のように、充実した毎日を子どもたちと共に過ごせるよう、よく目を合わせて時間を大切に過ごしていきたい。

<研修報告の様子>

（参考資料）

# 「持続可能な開発目標（SDGs）」とは？

2015 年 9 月の国連サミットで採択されたもので、開発途上国だけでなく、先進国も含めたすべての国が取り組むべき 17 の目標と 169 のターゲットが定められた、2030 年までの国際的な目標です。「誰ひとり置き去りにしない」をキーワードに、私たち一人ひとりが問題を「自分事」としてとらえ、努力していくことが求められています。

JICA は、開発途上国での長年の経験を活かし、国内外のあらゆるパートナーと連携しながら、SDGs の達成に貢献していきます。また、国際教育プログラムを通じて、SDGs への理解促進にも積極的に取り組んでいきます。

今年度、教師海外研修に参加された先生方も、SDGs の視点からラオスを視察・訪問し、持続可能な社会や発展について考え、授業を展開されています。

**1. 貧困をなくそう**

あらゆる場所で、あらゆるかたちの貧困を終わらせる

**2. 飢餓をゼロに**

飢餓を終わらせ、栄養を改善し、持続可能な農業をすすめる

**3. すべての人に健康と福祉を**

全ての人の健康的な生活を確保し、福祉を推進する

**4. 質の高い教育をみんなに**

全ての人に公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を提供する

**5. ジェンダー平等を実現しよう**

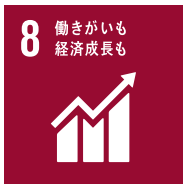
世界中で女性と少女が力をつけ、ジェンダー平等を実現する

**6. 安全な水とトイレを世界中に**

全ての人に水と衛生設備（トイレ・下水道・ダムなど）を保障する

**7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに**

全ての人が、安くて安定的に発電できる持続可能なエネルギーを使う




**8. 働きがいも経済成長も**

持続可能な経済成長を促進し、全ての人が働きがいのある人間らしい仕事ができるようにする

**9. 産業と技術革新の基盤をつくろう**

災害に強いインフラをつくり、持続可能な産業化を進める

**10. 人や国の不平等をなくそう**

国内および国家間の格差を減少させる

**11. 住み続けられるまちづくりを**

街や人々が住む場所を、安全で災害に強く、持続可能な場所にする

**12. つくる責任つかう責任**

持続可能な消費と生産のパターンを確保する

**13. 気候変動に具体的な対策を**

国の政策や計画に気候変動対策を盛り込む

**14. 海の豊かさを守ろう**

海洋と海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する

**15. 陸の豊かさも守ろう**

陸の生態系を保護し、砂漠化への対処、土地の劣化、生物多様性の喪失を止める

**16. 平和と公正をすべての人に**

誰一人のけ者にされない社会と、すべての人が法律にアクセスできる社会を実現する

**17. パートナーシップで目標を達成しよう**

目標達成のために必要な行動を強化し、持続可能な開発に向けて世界各国が協力する

参考・引用：国際連合広報センター「2030 アジェンダ」、外務省「JAPAN SDGs Action Platform」